

故郷を想ひ

福井孝平

教育長の可児さんと親戚で、私の一級下の可児先生が大学時代横綱千代の山と練習したこともある、私にいろいろと相撲のお話をしてくれた。

可児先生も相撲が強く、大学一年頃は稲倉石で私が作った土俵で、私の仲間たちと一緒に練習したものだ。その時の實力は私と勝ったり負けたりだったが、私も少し自信があった。ところが、彼が二年になって、

また稲倉石で交換練習したときは、テンデ相撲をさしてくれなかった。いくら頑張つて突っ込んだら、まわしに手がかからなかった。僅か一年であんなに強くなるとは全く思いもよらなかつた。

二年から彼は、明治大学のレギュラーになったとのこと。体重も九十キロ以上になっていたし、後々彼は柔道もやった。そ

の頃、私は柔道着をつけてやった記憶がないので、もし私が一戦交えていたら殺されていたかも知れない。ずうと後輩になるが、今の◎長谷川社長も日大の相撲部で活躍していた一人で、一度だけ琴平神社の土俵で取り組みを見たが、さすがに押しの型、すり足の運び方等はピカ一だった。

三、四年先輩で、札師に行つた浜五の石岡さんも、学生時代団体戦で日本一に輝いたメンバーの一人で、この方も可児先生同様柔道も「札師に石岡あり」

小学校で《お化け》騒動

ガラんとした大きな建物、薄暗い裸電球がポツンとついているだけの夜の校舎。

「女子便所にお化けが出る」大して話題の無い田舎の小学校のこと、そのうち、面白半分話しの尾ひれがついて、たち

と言われた。猛者先生、今も健在なりや？

また、話がずっと古くなるが初代の蓮実先生は、若い頃野球をやっていた、確かレフトを守っていた。たまたま港町の松尾さんの打ったデッカイレフトフライを、すぼつとクラブに入れて「スリーアウト、チェンジ」悠々とベンチに引き揚げ、例の大人（たいじん）微笑が懐かしい。後で知つたが、学生時代はボートの選手とか……びっくりしたなあ、もう——。

（以下次号）

まち学校中の評判になつてしまつた。

そして、とうとう時の竹林源次郎校長は朝礼で全校児童に、「『お化け』は誰かのいたずらであり、今は戦争中なので、そのような流言はいけない。」ことを注意した。

昭和十五年五月十四日 曜日のことであり、当時の学校日誌に記載されている。

- 三分の一が休業（十八年）
- 古平漁業協同組合が解散して古平漁業会を設立（十九年）
- 練大漁で古小では五年以上の児童が二週間臨休（同年）
- 米軍の命令で、町内会・部落会・隣組が廃止（二二年）
- 六・三制の新学制による小学校が発足する（同年）
- 初の民選による町長として、大沢吉三郎が当選（同年）
- 古小校歌が新しく制定され、以前の校歌は廃止（二四年）
- 積丹沖で北隆丸が遭難したが古平救難所の救助船により全員が救助される（二五年）
- 大沢吉三郎町長が任期中に死去する（同年）
- 古平中学校体育館が新工法により竣工する（三十年）
- 練刺網漁船第八栄勝丸が沈没し六名が死亡する（三二年）
- 練刺網漁船勝栄丸が転覆し全員が死亡する（三三年）
- 二葉婦人会が結成、会員八十余名会長小竹栄子（三四年）
- 古平町国民健康保険業務を開始、加入率三六％（三五年）

きびしい海の交通取り締まり 違反すれば積荷没収

〔商船の積み荷超過を禁止する通知〕が出される

明治になり、蝦夷地もその後北海道と命名され開拓使がおかれるようになる。新天地を求めて渡道してくる人たちが急激に増えてきた。特に海産物の取り引きが盛んになるに伴って、船の往来も激しくなってきた。ところが、それまでは比較的温和な本州沿岸を航行していた船が、荒天になりやすい、しかも未知の北海道に航行して来るので、海難事故も非常に多かつた。そして、その大きな原因が、船の積石数より多い荷物を積んでいるからだとして、明治十年、開拓長官名でこれを禁止する罰則つきの通知を府県に出している。

その原文を書き直すと、おおよそ次のようなものである。

『従来の日本型船（和船）は構造が弱いため風波にもろく、常に転覆の危険にさらされている。ことに冬の北の海は風浪が激しく、航海にも難儀するところである。それなのに船主は危険による損害を考えないし、また、乗組員も全くその危険であることを恐れていない。その上、乗組員たちはこっそり貨物を買っては船主に隠して

海岸に接近して岩礁に衝突したり、港口でわか風の風を避けることが出来ないで転覆したりしている。

これは、西洋型船より構造が劣っていることもあるが、何と云っても積石数を超過していることが大きな原因である。溺死者の割合が少ないのは、海岸近くで破船しているからである。これからは、各港船改所規則により、日本型商船はすべて船鑑札を検査し、積石数を超過している時は、その超過している分の積荷をすべて没収するのでこのことを通知する。

明治十年二月

開拓長官 黒田清隆

船に積込み、それを売って自分の儲けにしている。この貨物がいにもなる。海上が平穏な時はいいが、時化て来るとこの荷物を海になげたり、あげくの果ては沈没して貴重な人命まで失うことになる。

明治七年、全道で破船の数百七十五隻、溺死した者六十八人である。

いったん時化ると港を探し、

明治二年、古平郡役所が設置されたが（古平町開基の年）、それから五年後の明治七年十月二日、古平郡潤内で破船した商船の数は、記録に残っているものだけでも二十九隻ある。そして船名・船型・積石数・船主・船主本籍・乗組員数・死者・破船月日が記録されている。

- 降雨と融雪により増水し古平川堤防が決壊する（三六年）
- 古平町長選挙で伊藤由松が無競争で四選される（三七年）
- 古平小学校新地分校が本校に統合される（三八年）
- 古平高等学校が新地分校跡地に移転する（同年）
- 古平体育連盟が結成され会長に越中庄七が就任（同年）
- 沖、明和両小学校が古平小学校に統合される（三九年）
- 新生婦人会が古平保育園を開く、園長高橋まつ（四十年）
- 古平町史編纂室が町条例により設置される（四二年）
- 三ツツミ沖出漁船団壮行会を古平漁協主催で行う（同年）
- 町会議員立候補者の合同演説会を開く（同年）
- 稲倉石中学校が古平中学校に統合される（四六年）
- 花の木幼稚園が設立、古平保育園は廃止になる（同年）
- 古平高等学校全日制家政科の設置が認可される（四七年）
- 古平町長伊藤由松が逝去し、文化会館で町葬（四八年）

明治七年 古平郡潤内で破船した船の一覽

船名	積石数	船主本籍	乗組員
正恵丸	六九三石	摂津国	十名
西重丸	八六六〃	同	*十三名
久徳丸	五六七〃	同	*十一名
快運丸	八六五〃	同	十二名
卯日丸	六二三〃	同	十一名
和合丸	二九四〃	同	六名
寿永丸	五〇九〃	越中国	九名
幸福丸	五八三〃	同	九名
栄寿丸	四七七〃	同	九名
稻荷丸	一〇〇〃	同	四名
弁天丸	六九八〃	同	十名
栄普丸	五一八〃	同	九名
長尾丸	四〇〇〃	同	八名
小徳丸	二五六〃	同	六名
久吉丸	一四五〃	渡島国	五名
観音丸	六九七〃	同	十二名
豊隆丸	八六七〃	若狭国	十二名
神力丸	二三八〃	越前国	六名
隆福丸	七二三〃	同	十三名
幸得丸	不詳	同	十一名
長寿丸	三四三〃	同	八名
吉祥丸	四六五〃	小樽郡	九名
幸栄丸	三一六〃	能登国	六名

改寿丸 四五〇石
 大徳丸 二四八〃
 明神丸 三〇〇〃
 千吉丸 二四五〃
 清徳丸 一〇九〃
 喜得丸 七六〇〃

※北海道立文書館資料集「稟裁録」より転載
 文中の*は、溺死者があつたもので、三隻で九名が溺死。

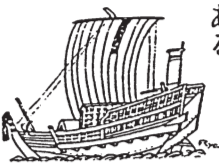
以上二十九隻の船が潤内で遭難したのは十月二日のことであり、時期から考えて恐らく台風の襲来によるものであろう。当時船入潤が無かつたとはいへ、こんなにも多くの船が一時に遭難するというのは、やはり先の指摘にもあつたように日本型船の作りにも原因があつたろうが、船入潤の無かつたことが一層被害を大きくしたようである。

能登国 八名
 越後国 七名
 同 八名
 陸奥国 八名
 佐渡国 四名
 加賀国 *十二名

ある。

また、これら北前船の本籍地を見るとほとんどが本州である。利益の多かつた北海道との交易のためには、文字どおり「板子一枚下は地獄」の命がけの航海をして来たわけである。

その後の漁業の発展にともない、また、避難港としての船入潤が出来たのは、ずうと後の昭和八年八月も末のことである。



- 古平町役場に「なんでも相談係」が新設される(四九年)
- 北後志広域消防組合が発足、古平支所長宮本良夫(同年)
- 練刺網漁船第一宝来丸が遭難し、六名が死亡する(同年)
- 古平町ソフトボール協会、野球協会が結成される(同年)
- 稲倉石鉱山の閉山で、同郵便局も廃止される(五十年)

よめしがき

雪の多かつた割りに雪解けが早く、水ぬるむころとなりました。鮫漁華やかな頃ですと、模様は期待する人たちが浜は活気に溢れ、大勢の漁夫も入り込んで大賑わいなのでしようが、今は港も静かで、加工場で働く人の姿が忙しそうです。

《せたかむい》も六号を数えました。「前の号から欲しい」という方も多くて、足りない号を刷りました。ご希望の方は編さん室へお申し出ください。